

SHIN CLUB 189

(株)辰 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS渋谷ビル5F

tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450



今月のトーク/monthly talk

「恵比寿 N ビル」 撮影：小川重雄

線路

写真は、このたび恵比寿に建ち上がったオフィスビルです。建物は、少し高く盛り土された JR 山手線の線路に面し、ガラスファサードの佇まいが周囲に軽やかな印象を与えています。

建物がぎっしりと建ち並んだ都会では、向かい合うビルディングで互いの顔さえ見えるような関係が少なくありません。しかし線路敷の部分では上方の空間が開放され、自然の景色を見ることが出来ます。それも、この場所のように線路敷にある程度の幅が確保されていればということです。もし、幅が確保されておらず、目と鼻の先を毎日朝から夜まで電車が通り過ぎるようであれば、騒音、プライバシーの面などが厳しくなります。

設計者の上西明氏は、この線路空間は都市の中では川のような存在、「第2の自然」と位置付けました。盛土の上の線路、それに続く前面道路は、建物を建てる上で決してマイナスになりませんでした。

もともと線路そのものは、煙を出す「蒸気機関車」というそのスタートから、居住環境に対してはネガティブな存在でした。エネルギーが石炭から電気になって、騒音を出さない電車への改良も進んでいますが、一端敷かれたものをおいそれと移動するわけにはいきません。狭い場所を走り抜ける線路を、新しく変化した環境に合わせて作り直すのは、本当に何年かかります。芸術的な仕事になるといってもいいですね。渋谷では今、そのような工事が進行しています。最初に線路そのものだけでなく、少し広めに敷地を取って、プラスアルファの変更を加えることで、線路はもっと魅力的な環境になるかもしれません。

自然の川はどうなのでしょう。都会では交通主要路であった昔から、土手に桜並木やきれいな歩道をつけることで、心地よい環境になっていた場所がたくさんあります。また、飯坂温泉は摺上川沿いに隙間なくぎっしりと並んだ旅館・ホテルの景色が名物です。建物の中の部屋も見えるといえば見えるのですが、川幅があるのでそんなに気になることはありません。障子を閉めればいいのです。建物への出入り口は川と反対側になり、そちらには温泉街の小道が連なり、人々は散歩や買い物を楽しみます。

では、現代の広い幹線道路はどうでしょう。排気ガスに見舞われるので、基本的には歩き回ることはありません。ひとたび大きな幹線道路になってしまえば、駐車場は必要不可欠。総合施設ができれば、大渋滞を引き起こすことも少なくありません。ファストフードの店やレストラン、おなじみの景色だけが広がります。

それから、沿道の高い建物は、幹線道路の内側の地域への騒音、排ガス、火災を防ぐバリアとなって機能するとも言われています。でもそのバリアとなっている建物自体も、本当はどうなのでしょう。道路との間にあることで損をしているとしたら残念です。

大動脈から、毛細血管にいたるまで良い場所にする事ができないでしょうか。血液はきれいなもの、つまり車も CO2 や有害物質を出さないものにして、ヒトの移動手段も自転車から自動車、バス、電車などの公共機関までいろいろなレベルのものを効率的に利用する仕組みを整えることが大事ですね。道路も緑地帯を作り、それぞれのネットワークをうまくつなげる「モビリティマネジメント」というそうですが、線路と建物のことを考えていたら、道路に行きついてしまいました。

恵比寿Nビル

線路際のオフィスビル

敷地は、恵比寿駅から徒歩 5 分、JR 山手線の線路際に位置する。前面の線路敷と、その両側の道路を合わせると 50m ほどが前面道路の幅となる。ここは高度地区の高さ制限 30m もかかっている、その結果斜線制限により外観に影響を受けない特別な場所になっている。線路敷という「第二の自然」、渋谷駅方面まで見渡すことのできる線路上方に広がる空間を最大限取り込んだオフィスを目指した。キャンティレバーで張り出した上部の足元には、線路を走る電車からの視線を受け止めるファサードが立ち上がった。キャンティレバーを支えるように立つ黄色い鉄骨柱がアクセントを加えている。

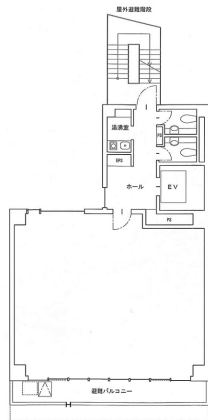
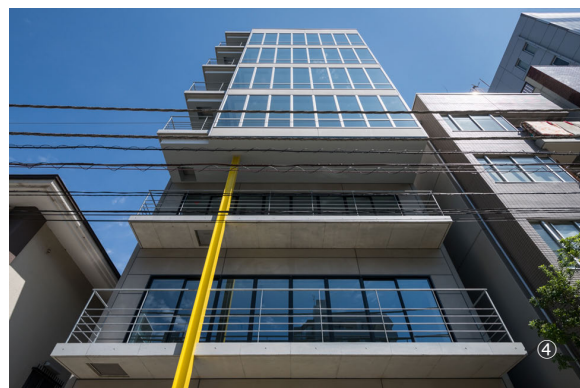
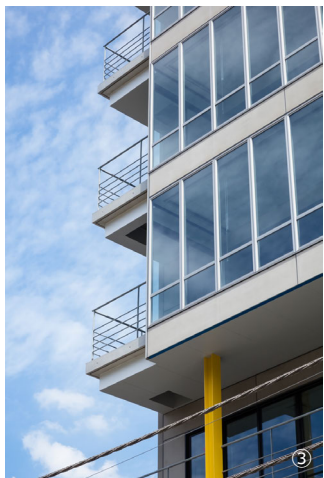
オフィスはエントランスを擁する 1 階、バルコニーのある 2,3 階、上部に張り出した 4 階から 7 階、と 3 タイプのオフィスで構成されている。2011 年の着工直前、東日本大震災があり、ストップ。2014 年にリスタートした。どこにでもある既製品のアスロック横使いの外装とした。ただし寸法には工夫を施し、アスロックの幅は、通常の 600 mm ではなく階高 3300 mm を 6 等分した 550mm としている。手摺高さは 550 * 2、扉高さは 550 * 4、開口高さもそのモジュールに合わせている。天井高は、この規模のオフィスビルとしては高さのある 2650mm とした。3300 mm から 2650 mm を引くと、残りが 650mm。その中で、フリーアクセスと RC スラブと小梁、設備機器を納めた。

温熱環境では、2 階以上のオフィスの空調された空気を各階の EV ホールに導き、そこからロスナイ（熱交換換気機器）に送ることで、EV ホールまわりは外部と空調された環境の中間環境になっている。冷暖房設備を設置しないで、省エネ、節電効果を上げている。また PS (パイプスペース) 等はすべてホール側に配置し、メンテナンスを容易にしている。

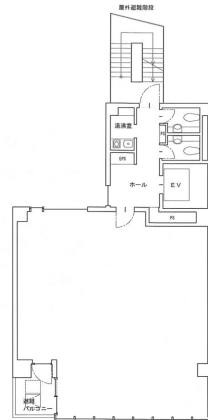
建物後方の屋外鉄骨階段には連結送水管を、目立たないように主柱の内側に抱き込む形で収めている。それら空調衛生設備、電気設備は何気なく納まっているが、建築、機械、電気など施工サイドの、施工図をきちっと描いて納めようという意志と努力の結果だと思う。

全面開放にした開口部からは毎日電車の動きが良く見え、ゆるやかなカーブが続く渋谷駅方面まで遠く見渡せる。鉄道ファンなら、仕事の合間にほっと息つきながら眺める景色は、また格別だろう。

(上西明氏 談)



2-3 階平面図

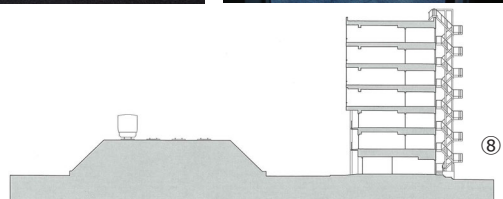


4-7 階平面図

所在地：渋谷区
 構造：S造
 規模：地上 7 階
 用途：事務所
 設計・監理：上西明 / 上西建築都市設計事務所
 構造：花輪建築構造設計事務所
 設備：総合設備計画
 施工担当：池山
 竣工：2015 年 9 月
 撮影：小川重雄



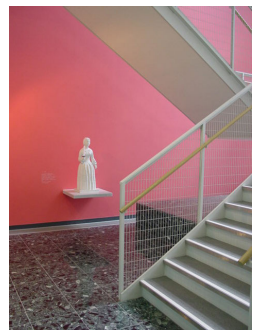
①線路反対側から全景を臨む②建物の北東面。外部鉄骨階段③ファサード詳細。すべての要素が集まるポイント④ファサードにアクセントを加える黄色い鉄骨柱⑤ 4 階オフィスから渋谷駅方向を臨む⑥ 7 階オフィス。天井は小梁、設備機器が納められている。照明設備と目地を合わせてすっきりとまとめられている⑦外部鉄骨階段の柱に設置された、連結送水管のボックス。階段の手すりと柱の間に収められ、通行の妨げにならない（この写真のみ撮影：上西明）⑧線路敷きと建物の関係図





Akira Uenishi

上西明氏 事務所にて 撮影：アック東京



「奈良県医師会センター看護専門学校のエントランス」
撮影：上西明

今日は、「恵比寿 N ビル」の設計者、上西明氏にご登壇いただきます。一大学院では、横文彦先生の研究室に入り、卒業後も先生の事務所に入られたのですね。

上西：そうです。建築のことはもちろん、建築と都市をつなぐアーバンデザインについても、現在に至るまで、一貫して先生からの教えは忘れていないですね。大切なのは「その場所をどう生かすか」ということです。どういう特性を持つのか、目に見えないものも大事にする。それが建物を環境の中で生かすことにつながります。

例えば、今回の恵比寿 N ビルの場合、恵比寿という都市空間のなかで、線路の敷地はあたかも郊外の川のような条件をもたらしてくれています。「空地」であり「遠くまで眺望が開ける場所」であり「第二の自然」と言えます。川を活かした設計が線路に置き換えられると言ってもいいですね。以前、川に隣接するクリニックを設計しましたが、相通じるものを感じました。

今年は、横先生の事務所創立 50 周年で、この 11 月までその展覧会が代官山の「ヒルサイドテラス」で行われていました。国立競技場の建築計画案見直しについて、社会に対して発信された先生ですが、先日集まった会でも「仕事があるから」と先に帰られて、我々もあらためて先生の姿に刺激を受けました。展覧会の三つの会場のうちの一つになった「ヒルサイドプラザ」ですが、私が所員時代、担当したもので、「ヒルサイドテラス」第 V 期の多目的イベントスペースとしてつくられたものです。ご存知の通り、「ヒルサイドテラス」のプロジェクトは 1960 年代後半から長い時間をかけて、集合住宅、商業空間、ギャラリーなどがつくられてきました。コミュニティを形成して、その中で必要と思われるものがどんどん生まれて、代官山という場所の持つ文化を生み出していきました。

その他にも、13 年間の所員時代には、幕張メッセや横浜北仲通再開設計画など、様々な仕事を担当しましたが、最後の担当は宮城県の名取市文化会館でした（1997 年竣工）。市役所や体育館に隣接する市の中核ゾーンにあります。2011 年の東日本大震災では、海岸側の閑上地区や仙台空港が津波の被害に遭いました。皆さんの記憶にも新しいことだと思います。私も、その被害が気になり、当時の状況を詳しく聞く機会を得ました。

文化会館のある市の中心エリアの東側には、仙台東部道路が盛り土の上に作られていて、一種の堤防の役割をしたおかげで、市街地への津波の侵入が抑えられました。非常用電源が機能していた文化会館はもともと指定避難所ではなかったのですが、町中が真っ暗な中、そこだけが明るかったので、大勢の人が閑上方面から避難してきたそうです。会館の方では、エントランス

ホールやホワイエなどを開放し、対応にあたったと聞きました。それらは冷暖房が効き、換気だけの体育館のようなスペースに比べてはるかに良い環境でした。また和室や講義室などの小スペースは、病気の人の隔離スペースともなり、感染者の拡大を防ぎました。そして 6 月に仮設住宅が整備されるまで 84 日間、避難所として機能したそうです。8 月からは市民の文化活動がリスタートし、復興支援や慰問のコンサートなども開かれました。その後、文化会館の庭には、ドイツの財団から申し出のあった寄付により、横先生の設計で「希望の家」が子供たちのために建てられました。

文化会館は避難所として想定した設計は行っていなかったのですが、建物のハード面で「耐震性を備えた構造体」、「非常用電源」という基本性能を備え、加えて「病人を隔離することもできる小スペース」があったこともあり、柔軟性のある管理者の対応を含めて避難所として機能できました。基本性能を備えたある広がりのあるスペースの汎用性が実証されました。

一独立されてから、奈良県の医師会センターや大田区の障害者授産施設、個人病院などを設計されていますが、医療関係が多いのですか。

上西：特にそういうことでもありませんが、建築について思うのは、スペースの大きさや基本性能へのゆとりが大事だということですね。コスト、空間があまりにぎりぎり、ある目的性能に限られたものだ、長い目でみてその建物は長続きしにくい。定量化しにくいところはありますが、ゆとりがあれば、設備面でも将来的に更新、変更がしやすい。建築は、使い続けることが最も省エネであり、省資源です。基本性能を持った建築をつくると同時に、使い続けるための知恵も必要だと思います。

一ところで上西さんは、建築学会の委員としての仕事も多いそうですね。

上西：文化施設小委員会のメンバーで『劇場空間への誘い』（2010 年発行：鹿島出版会）という本をまとめました。以前小委員会から出版した『音楽空間への誘い』の続編にあたるものですが、芝居小屋から始まる劇場空間の本質の一端を明らかにし、建築家だけでなく、演出家やプロデューサーとの対話も盛り込みながら、次世代の劇場を考察しています。今は優れた舞台設備、音響設備を駆使した空間テクノロジーがありますが、一方で原初に立ち戻るような劇場空間もあります。その昔見た栃木の太田石の石切り場での、太田省吾さんによる無言劇も忘れられません。演劇を通し、その空間でしかできない非日常体験ができる空間があります。どちらもあろう、ということです。いろんな方にお読みいただきたいですね。

一本日は、どうもありがとうございました。

「その場所にしかない特性を生かした建築をつくっていききたいですね」

上西 明

1959 年 東京都生まれ
1982 年 東京大学工学部建築学科卒業
1984 年 東京大学大学院修士課程修了（建築学科横文彦研究室）
1984～1997 年 株式会社横総合計画事務所勤務
1998 年 上西建築都市設計事務所設立
共立女子大学 家政学部 建築・デザイン学科 非常勤講師（2008 年～）
工学院大学建築学部 非常勤講師（2012 年～）
関東学院大学大学院建築学専攻 非常勤講師（2012 年～）

主な作品

奈良県医師会センター、大田区うめのみ園分場、ガラスブロックホール、緑の中の診療所、橋詰の医院、NY ウェストエンド・アパートメント



①橋詰の医院（奈良県生駒市）
撮影：上西明
2つの川が合流する敷地に45°に振られた、内科と眼科、2つの医院が収められている
②『劇場空間への誘い』（編者：日本建築学会、発行：鹿島出版会 ¥2800）建築家だけでなく、串田和美などアーティスト、演劇関係者のインタビューも織り交ぜている



11 月社内勉強会

「継続のコツは明確な目標を持つこと」～大村益次郎氏をお迎えして～

11月7日の社内勉強会の講師にお迎えした大村益次郎氏は、旅が大好きで、弊社社長森村とも互いに旅をしていたときに会った仲とのこと。今でも若い頃と変わらず新たな目標に挑む姿勢が、同世代の方の共感を生んでいます。若い世代の人たちにも大いに学ぶ点がありそうです。

高校卒業後、私は海上自衛隊に入隊しました。徳島に配属され、通信部門で暗号を担当、しかし東南アジアに行こうと3年で辞めました。当時は、『何でも見てやろう』という本がベストセラーになっていて、自由気ままな旅が流行していたのです。でも外国に行く前にまず国内。野営やユースホテルに泊まりながら、3年かけて自転車で日本を一周、16200 kmを踏破しました。森村さんと会ったのもこの頃のことです。

その後、仙台で証券会社、不動産会社などに勤め、石膏ボードのメーカー「三井東圧化学」に中途入社することができました。最初の赴任地、会津ではいきなりお客様に名刺を投げられました。それこそですね。同じ名前の大村益次郎は幕末期、長州藩兵を指揮し、勝利の立役者となった人ですから、幕藩側の会津では今でも恨まれています。でも一発で名前を覚えられるというメリットもあって、次第に仕事が楽しくなってきました。旅好きの仲間15人でヨットを買って、「親潮レース」に出場。有給休暇をフルに利用して、夏休みは長期クルージングしたものです。しかし交通事故を起こしてしまい、札幌へ転勤となりました。

札幌で出会ったのがトライアスロンでした。ハワイの海兵隊がマウイ島で始めたトライアスロンは日本でもブームが巻き起こり、当時は、4 km泳いで、150-200 kmを自転車、そしてフルマラソン 42km という鉄人の競技でした。仕事はほぼまじめにやっているのですが、頭の中は週末のトライアスロンのことばかり。毎日朝 10 km走り、夜はウエイトトレーニングや水泳で鍛えて、体重 80kg、ウエスト 92cm の身体も絞れてきました。指導者が良かったのか、フルマラソンにも出るようになりました。

さて、トライアスロンをやる人間の憧れの的がハワイの世界大会です。1999年、51歳の時、良いタイムが出て行けることになりましたが、ちょうどその頃、会社では石膏ボード部門の譲渡話が出ていました。しかし年齢的には後はない。妻と娘を伴って参加して良い思い出になりました。仕事の方はそのまま出向先に転籍し、それ以降、トライアスロンに出るのは難しくなり、マラソンが目標の中心になりました。マラソンのいいところは、練習量を増やせば増やすほどタイムが縮まるということです。当時はフルを3時間で走れるくらいになりました。

61歳、会社を退職。今度は四国八十八ヶ所巡礼のお遍路さんの旅に挑戦しました。弘法大師と同じように、1日20~30km歩いて45日で周るといふ旅です。定年後の不安、家のローン、退職金のことなど考えていたのは最初だけ。歩き始めて3-4日くらいから無我の境地になりました。お金ではなく、「時間を持つこと、健康なこと」は何にも代えがたい贅沢なことだと実感しました。翌年は山陰・九州・中国地方を自転車で旅しました。

年金生活だけでは大変なのでボイラーの仕事をすることにしました。朝7時から夜6時まで勤務時間は長いのですが、作業は簡単、時間はたっぷりあります。そこで運動だけでなく頭も鍛えなくてはと思い、年に2回はなにがしかの資格を取ることにしました。最初の年はボイラー技士2級、

次は危険物取扱者、第2種電気工事士。今は英語をやっていますが、毎日少しずつ努力していくと何とかなるものです。

そして一昨年、65歳。いよいよ長年の夢、アメリカ横断自転車旅行に挑戦することにしました。札幌からロスアンゼルスに飛び、自転車でニューヨークへ行くのです。ところが、今回のアメリカの計画は最初から想定外のことだらけでした。ロスアンゼルス空港では当然ながら日本語の表示はなく、ウロウロ。やっとサンタモニカのホテルにたどり着いたら、日本人は2人だけで、看板を見ても何を食べたらいいかわからない。日本一周に毛が生えた程度と思っていたのは大間違いでした。訛りの強い英語は全く分からなかったし、スマホがあるから翻訳もできると考えていたら、androidの翻訳機能の操作が出来ず。そもそも電波が飛んでこないとか、陽射しが強くて画面が見えないとか、この歳で初めてわかったことばかりでした。

夜になったら路肩や教会で寝ればいだろうと考えていましたが、走っても街らしい街がない。スーパーマーケットではハム1つ買うのも大きいサイズしかない。グランドキャニオンに行く途中では、喉が乾いて水を飲もうとするとお湯になっている。唾液が良く出る飴をもらいました。また、向こうのキャンプ場はキャンピングカー専用で、「1人でテントを張るなど浮浪者でもやらない」と言われてしまいました。

アリゾナでは、フリーウェイの隣の一般道を走るつもりでしたが、4,5年前に封鎖されていてフリーウェイを自転車で行くことになる。ここを走るとすぐにパトカーが来る。道路は何百キロも続いています。結局現地の人に助けをもらいながら走りました。後でわかったのは、道路脇にテントを張るのは違法で、運が良かったとのこと。カリフォルニアやアリゾナを昼間走ったら脱水症状で死ぬから、普通は朝に走って、昼間は走らないということでした。何を食べたらいいか、どこに泊まったらいいのかがストレスになって、25日目に「かっこ悪いけれど帰るしかない」とフェニックスから札幌に戻りました。妻が言うには、1週間くらい拙い英語の寝言を叫んでいたそうです。

今、夏の間は、福島に行って除染作業を行っています。原発反対運動の前にまずは収束させることが大事だと思っています。1日1万6000円の報酬も60代の人間にはあり得ない金額です。仕事は労働作業で、日本中から多くの人が働きに来ていますが、ギャンブルに明け暮れる人も少なくありません。被爆量によって働ける期間が決まっていますが、私は影響が出る頃にはもう歳ですから構いません。原発内は50歳以上の人は入ることが出来ないそうです。私は逆だと思っています。

来年も、夏の3か月は除染作業をするつもりです。そして70歳になったら、再びアメリカ横断(縦断?)旅行に挑戦するつもりです。モチベーションを持続するのに必要なことは、明確な目標を持つことです。達成すれば、新たな目標が生まれます。

大村 益次郎

北海道札幌市在住
1948年生まれ(67歳)

日本一周自転車旅行、トライアスロン、ヨット、四国八十八ヶ所巡礼、アメリカ大陸自転車横断旅行に挑戦。
定年退職後は、年金生活の傍ら、ボイラーマンや除染作業員に従事。現在もアメリカ大陸横断を夢見て、トレーニング中。



①



②



③

①四国八十八ヶ所巡礼にて②1999年、トライアスロン世界大会にて。左上の数字1343が順位(参加者1500人)17時の関門前に到着は上出来とのこと③アメリカ横断旅行中にグランドキャニオン国立公園にて

編集後記

- ・講演会で、大村様の目標達成には、「奥様の暖かい愛情が欠かせないですね」という声も出ましたが、家族を大事にされてこそできることですね。
- ・冬季休業は、12月30日~1月4日となります。よろしくお願いいたします。

(株)辰通信 Vol.189 発行日 2015年12月10日 編集人: 松村典子 発行人: 森村和男

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-8-10 TEL:03-3486-1570 FAX:03-3486-1450 E-mail: daihyo@esna.co.jp URL: http://www.esna.co.jp